研究発表要約

マードックの *The Black Prince* とマキューアンの *Saturday* を比較する
―BT タワーが象徴するもの―

中　窪　　靖

本発表は、マードックの *The Black Prince* とマキューアンの *Saturday* とを、ポストオフィスタワーをキーワードとして比較するものである。

The Black Prince では、主人公のブラッドリー・ピアソンの住いはポストオフィスタワーのお膝元にある。このタワーは彼の語る 'A Celebration of Love' の世界の出来事を象徴しているように思われる。彼はまず作品執筆のために、一時的に住み慣れた家を離れてパタラという名の海辺の別荘に移動することを考える。ところが、この彼の計画はすぐさま頓挫する。彼のライバルであり、友人でもあるアーノルド・バフィンからの一本の電話が彼に出発を思い止まらせる。アーノルドは、妻を殺してしまったと言う。また、義理の弟は、元妻のクリスチャンがロンドンに戻ると言う。さらに、夫との仲が険悪になった妹プリシラが、彼の家に転がりこむ。

Saturday の主人公ヘンリー・ペウロンは、ベテランの脳神経外科医である。彼は多忙な平日が終わる土曜日の夜明け前に窓の外に見える光景に思いを馳せる。過ぎ去った1週間を思い出しながら、来るべき週末を迎えようとしている。彼の住いも、ポストオフィスタワーの近くにある。主人公はタワーそのもののように、窓からの光景を見ている。

2つの物語は、それぞれがロンドンを舞台としているのみならず、ランドマークのポストオフィスタワーが重要な役割を担っている。タワーは、それぞれに独自の役割を担っている。登場人物たちを見下ろすタワーは、時々の彼らの心の動きを反映する。

The Black Prince においては、妹プリシラの自殺未遂の深刻さは、太陽光線を反射するタワーのもとで眠りこける彼女の姿と対峙され、妙な滑稽さを醸し出す。夫の浮気が原因で住いに転がり込むプリシラは、ブラッドリーの行動を妨げる存在以外の何ものでもないが、彼女を精神的に追い込んだのは彼自身だと思っている。一方で、物語はよくしたもので、離婚してイギリスの戻ってきた彼の元妻クリスチャンと、彼にとっては一人の女性でもあるレイチェルとが親身になって、そうした彼の重荷であるプリシラの面倒を見てくれる。これも、物語の中心 'A Celebration of Love' が彼の創作であると考えれば、納得できる。作者の都合で物語は進行する。再びポストオフィスタワーの存在が大きくなるのは、彼がアーノルドとレイチェルの娘、ジュリアン・バフィンとの間にエロースを見出すときである。二人がタワーの34階にあるレストランで食事をすることは、それを象徴している。

一方、*Saturday* の中では、主人公はポストオフィスタワー近くの自宅から、まるでタワーのように、早朝の町を見下ろしている。また、彼が車でスカッシュのコートに向かうとき、タワーから逃れられないかのごとく、その周りを回っているうちに、バクスターとのトラブルに巻き込まれる。このときの接触事故が原因となり、バクスターはペウロンの自宅に押し入り彼の家族に危害を加えようとする。彼は要求をエスカレートさせ、娘のデイジーに服を脱ぐようにとせまる。と同時に、彼女が詩人であると知ると、詩の朗読を求める。文学的な素養が必要な著名な詩人の詩にバクスターが感銘を受けると、ペウロンは息子の力を借りてこの賊を階段の下に突き落とす。それは、この物語をある方向へと導く。ペウロンと妻の脳裏には一瞬、手術にかこつけてバクスターの命を奪うという可能性が浮かぶ。しかしながらペウロンは、執刀医となることを選択しながら、この賊の命を救う道を選ぶ。とはいえ、バクスターが生き続けることは、彼にハンチントン病という難病を苦難として負わせ続けることを意味する。

主人公ペウロンの傍らにポストオフィスタワーを配することで、事態は逆説的に推移することが象徴的に示される。